

茶の湯文化学会会報 No.84

第84号 / 2015年3月31日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

『又玄夜話』と『又玄夜話抜粹』を読む 横田八重美

茶書『又玄夜話』は裏千家八代の又玄齋一燈宗室（一七一九～七二）が茶堂を務めていた伊予松山藩の松平隠岐守定喬の参勤交代で江戸に滞在中、門弟の最上宗賦の質問に答えたものを書き留めたものである。なお宗賦の書したものは不明であるが、明治になって池田詮政（一八六六～一九〇九）が書写したものが、現在岡山池田文庫（旧岡山藩主池田家蔵書）に残されている。ところが『又玄夜話』は未刊ということもあって、寧ろ公刊された『又玄夜話抜粹』のほうがよく知られている。

その『又玄夜話抜粹』については、末宗廣氏が「一燈宗室居士 一燈宗室居士二百年記念」（昭和四十五年刊）に「又玄夜話抜粹 一燈茶道観」と題し翻刻、解説を行っているほか、『茶湯—研究と資料』四号（昭和四十六年・木芽文庫刊）に藤原武子氏が翻刻、解説されたもの、また『日本の茶書2』（昭和四十七年・東洋文庫206・平凡社刊）の榎林忠男氏・熊倉功夫氏校注などが知られる。

なお『又玄夜話』については、末宗廣氏が『淡交』（昭和四十九年六・七月・淡交社刊）に「又玄夜話」について」と題し紹介されている。

そこで、ここでは主として両書の書誌的な部分に焦点をあて、みていくことにしたい。

まず『又玄夜話抜粹』であるが、書名の如く『又玄夜話』の一部を抜粹したもので、一燈宗室没後九十年、幕末に近い万延元年（一八六〇）になって刊行されている。抜粹ということ、全体の五分の一ぐらいの分量になっている。美濃判十四丁。縦二五・二センチ、横一七・六センチ。奥書には

此冊子は余友中川宗常より傳へたる又玄齋夜話の打聞也 又玄齋は利休居士の遺孫千宗室一燈居士の別號也 居士主命にて江戸存留のころ其門に入玉ふ 又臨庵最上宗愷公居士に茶道を問給ひて其答を書記し又玄夜話と題しひめ おき玉ふを其後又松庵宗知公の駿府勤仕の折から写し傳へられたるなり 本の奥書は宗愷公のしるし玉へる原本也 余是をよむ事數回實に手の舞足の踏ことをしらす かくあつき教をいか傳同志のものにもしらせまほしく今其の要を抜粹してかくハものしつるになむ

萬延元年冬 友松軒自得斐田明自(花押)

江山関根為寶書

とある。一燈宗室が江戸に滞在中、門弟の最上宗魁が質問し、それに一燈が答えたものを『又玄夜話』と題し秘本としていたが、その後、又松庵宗知が駿府の城内でこれを写したという。それを万延元年(一八六〇)の冬に、友松軒自得こと斐田明が中川宗常より借りて写し置いたものを抜粋して出版したようである。なお千家の家元関係の著作が版行されたのは江戸時代を通じて、まさしく唯一の例である。

本書は「茶意」、「茶道」、「茶湯会」の三項に分けて論じており、その説くところは、

茶意といふは人に拘らずおのが一心を以つて一具を取あつかひ心より取心より置き心より汲み心より喫し心に味ひて一碗に一念をはなれ本心正しくして虚心となり 虚心より本心の正敷事を能知りて楽しむ茶意といひて禅道におなじ

というように「茶意」は心をもつてする茶の精神であり、禅の修行と同じであると述べる。また「茶道」とは、茶の点前であり、その知識であるという。「茶湯会」では心得を具体

慶應三丁卯歳

四月下念二日 玄春齋

宗泰(花押)

右明治三十年九月上旬より下旬迄
中田宗閑

宗匠より特別二借用シ写し終ル

大崎

池田詮政

とあり、つまり、天明七年(一七八七)に又松庵宗知が最上宗賦より借り、駿府の城内で書き写し、次に玄春宗泰に伝え、さらに明治三十年(一八九七)に岡山藩主池田章政の男池田詮政が裏千家十一代玄々齋宗室の高弟中田宗閑から借用して書き写した経緯が知られる。

内容をみると、一燈は宗賦の茶の湯についての質問に対し、懇切丁寧に答えている。たとえば、

一、釜掛り居候所へ水次持出候て水さし候者御座候、水少く成候ハ、咄居候内水次持出水さし候ても不苦候哉

との宗賦の質問に対して、

一燈は「稽古といえども釜の湯が少なくな

的に例を挙げて述べている。すなわち茶事を

催すにあたっては一通り茶の点前の稽古を積み、露地、座敷の飾りつけなどを会得して、それも自分の分相応にということではなければならぬことを説いている。これは茶の精神と知識が実践を通して現実のものとなり、高められていくことを論じている。

次いで、『又玄夜話』であるが、宗賦の書いたものは不明ながら、明治に至って池田詮政が書き写したのによれば、同書は「天」「地」二巻、墨付五十五丁からなっている。「天」巻は道具・点前・茶事などについて、「地」巻は茶意・茶道・茶湯会に分けその茶道論を展開するものである。

此一帖者最上宗賦又玄齋千宗室一燈今日庵夜話を委記し玉へるなる我もまた此道二遊んことを宗賦に乞しに一集を傳玉ふを駿州之城内の閑暇の日写し申畢
天明七丁未年初夏下九日畢
又松庵宗知

先師宗室より開書御写一覽之処無相違候他見御秘し可被成候畢
天明七年四月廿九日 又松庵

『又玄夜話抜粹』

一燈宗室↓又松庵最上宗賦↓又松庵宗知

↓中川宗常↓友松軒自得斐田明

『又玄夜話』

一燈宗室↓又松庵最上宗賦↓又松庵宗知

↓玄春齋宗泰↓中田宗閑↓池田詮政

残念ながら、今回一部の人物の特定にしか至らなかったが、今後の課題としたい。

『又玄夜話』は一燈が自ら語って聞かせた茶道論であるのに対して、『又玄夜話抜粹』の方は原本がある部分は一頁、ある部分からは数行をと、それを自由に構成し直し、仕立てられたものである。当時の茶の湯の要請に応じた結果の出版であろうが、『又玄夜話』の内容からはかけ離れたところもあり、一燈の論旨の極一部にすぎないように思われる。とはいえ七事式制定後稽古法の変革時期、茶の湯に対する考え方を知らうえで貴重な書といえよう。

理事會

平成二十六年年度第二回理事會が、十一月二十三日(日)午後二時より同志社大学至誠館三階會議室に於いて行われた。理事十六名に加え、幹事四名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

- 一、各担当理事より事業報告
- 二、平成二十七年年度総会・大会について
- 三、会長候補者選考委員会 委員の選出について
- 四、幹事増員について
- 五、会誌・会報について
- 六、その他

第一号議題では、各地例会の経過報告が行われた。

第二号議題では、来年度の大会について、六月七日(日)に東京において実施することが提案され、承認された。内容については、「幕末から近代における東京の茶の湯」をシンポジウムのテーマとし、大会担当幹事が企画案を作成することになった。また、大会発表者の募集については、会報ならびに学会ホーム

ところで、通観するに著者名についてこれまで紹介された名とは異なるように思われる。『又玄夜話抜粹』は「宗賦」としているのに対して、『又玄夜話』は転写本ということもあるが、「宗賦」と読みとれる。

また書写過程については、以下のような相違がみられる。

ページで実施することが決定した。

第三号議題では、佐藤理事、中村(修)理事、山田理事が委員に推薦され、決定された。次回理事会までに委員会を開催し、会長候補者を選出・報告することが決まった。

第四号議題では、東京から二名。近畿からは三名、合計で五名の推薦があり承認された。

第五号議題では、会誌について山田理事から、年二回発行の問題点について報告があり、同日午前中の編集会議の結果をもとに、次回理事会において会誌原稿投稿規程および会誌原稿審査規程の改正について諮る予定である旨が報告された。また、引き続き投稿論文へつながるよう、各地例会の運営をお願いしたいと要望が出された。会報については、池田理事より報告が行なわれた。また、会報への投稿原稿の掲載の可否については、これまでは会報担当理事三名で実施していたが、編集委員とも連携して可否を判断し、個人的反論などは掲載不可とし、研究性の高いものについては、会誌への投稿を促すこととなった。第六号議題では、次年度実施予定の研究會について中村(修)理事から計画案の提示があり、五月末に台湾での実施が承認された。

例 會

東京例会

(平成二十六年十一月二十二日)

「細川三斎と雪舟」

三宅 秀和

室町時代後期の画僧、雪舟等楊(一四二〇～一五〇六?)の評価の形成と拡大の発端は、大名毛利家や大徳寺周辺の禅僧や茶人、狩野探幽のような絵師の人的ネットワークで形成されていた雪舟評価の空気を基盤として、三代將軍徳川家光が催した寛永十七年(一六四〇)の品川大茶会と正保元年(一六四四)の江戸城西丸の茶会で雪舟絵画が茶掛として使用されたことにあるとの指摘が、近年なされている。細川三斎(忠興、一五六三～一六四五)は、雪舟画を複数所持していたことが細川家の名物由来記から知られており、本発表は雪舟画への三斎の関わりを見、雪舟画という新しい好み形成される動きに三斎が関与していたかを検討した。その結果、まず細川三斎の雪舟画所有は一次史料に見られるものであり、名物由来記の

記述と現存作品を合わせ考えると、複数の雪舟画を所有していたことが確認される。そして三斎は自らの美意識で所蔵の雪舟画を裂き、切断するなどの改変を行うとともに、所有する雪舟画を狩野派絵師に見せ、彼らは自らの絵画制作に役立てていた。大名毛利家や大徳寺周辺の禅僧や茶人、絵師の間で雪舟評価の空気が形成されていたというが、この空気の形成に、絵師との関係という一部ではあるが、三斎は寄与したといえそうである。最後に三斎と雪舟の接点を推測すると、三斎が一時領していた丹後国には雪舟の事蹟が残っており、それらに三斎は接して雪舟画収集が早かったと思われる。

「存星」系譜と問題点

福島 修

存星とは唐物漆器の一種である。その語は室町時代から現代にいたるまで使われ続けているものの、意味する範囲は一定ではない。これに関して発表者は平成二十四年に東支部例会にて「松屋三名物「存星盆」と「存星」の問題」と題して口頭発表し、奈良の塗師屋・松屋に伝わる三名物の一つ「存星盆」を糸口として考察を加え、問題点を確認した。こ

の際、中世における存星は、布目地に表層を溜塗りとして沈金を併用した彫彩漆の一種であったが、時代が降るにつれ意味が変化したことを指摘した。平成二十六年の五島美術館特別展「存星―漆芸の彩り」はこれを踏まえ

たもので、出品された七十点余りの伝世品を通じて、改めて存星という名の意味の広がりを目の当たりにすることとなった。本発表は、この展覧会開催に際し明らかとなった若干の知見を報告するものである。

中世における存星は、貴重な唐物のうちでも特に珍しく、言わば幻のような品であった。それが比較的目にしやすい状況になったのは、時代が降るにつれ定義の要件が緩み、その許容範囲が拡大していったためである。結果として多種多様な技法・様式が混在する大変やこしい現状が生じた。しかしこうした「存星」作品群は、中世の存星像を大元に置くことで、ある程度明解な系譜に整理することができる。祖形を元に共通する要素を見出すことで形成されてきた存星の系譜には、茶の湯道具の分類における一つの構造を見るこ

近畿例会

(平成二十六年十月十一日)

「用法から考える「天目」」

岩田 澄子

古資料を通して、「天目」が茶の湯でどのように理解されていたのかを考察する。中国由来の天目は「台天目」(天目を天目台にのせて使う)を基本とし、真・行・草の格のうち、天目だけが真の扱いをする。茶会記をみると「台天目は貴人専用になった」と思われるが、点前書を見ると「台天目は貴人用とは限らない」といえる記述がある。たとえば山田宗偏の「茶道便蒙抄」(一六九〇)には「台天目」と「貴人に上る台天目」の項があり、前者は貴人用ではない台天目といえる。

また、木版茶書の「草人木」(一六二二)は徹底した「台天目＝貴人用」の考えだが、近衛家熙は「台天目＝貴人用」の考えを否定し、台天目は格の高さに由来する扱いだという(『枕記』)。

最後に、初の禁中茶会(天正十三年十月七日)で用いられた二つの天目について検討する。まず御菊見之間で正親町天皇用に伊勢天目が使われ(点前は秀吉)、その後、端之御

座敷でその他の殿上人(大勢の公家や武家)用に白天目が使われた(点前は利休)。「貴人用天目は、名物ではなく新品で」という考えは秘伝で、伊勢天目は後に「草人木」で安物の天目の代表例として登場するが、秀吉が正親町天皇に使ったのは新品の伊勢天目だった。一方、その他の殿上人用の白天目は、秀吉の権力を象徴する名物と思われ、紹鷗―本願寺―信長―秀吉―の伝来をもつ白釉の和物天目である「紹鷗せと白天目」(前田家伝来の重要文化財、利休の書状付)の可能性がある。天目を用法から見ると、様々な様相が見えてくる。

(平成二十六年十一月十五日)

「室町時代御成における喫茶文化について」

橋本 素子

本報告では、室町殿(室町將軍家)御成において、茶はどの場面での場所、誰によって点てられたのかを明らかにした。前提として、御成の表向きのプログラムでは、茶会や茶事はないことを確認した。

まず、『君台観左右帳記』(藝大一・永正

一六年本)等から、会場の表の空間に室礼される相伴衆用の「とおりの茶湯」(惣茶湯)と、奥の空間、御休息所などに室町殿用に室礼される「うえの御茶湯」の二ヶ所以上の茶湯所が設けられることを抽出した。

次に、御成の「御菓子」と「御休息」において茶を飲む場合があることを指摘した。特に永享二年一二月の足利義教の伏見官邸御成と永禄四年の足利義輝の三好義長(義興)邸御成の事例から、奥に設定された室町殿用の茶湯所は、同室に御休所を設けており、「茶の湯」成立のメルクマールとされる「主客同座」の前身をそこに見ることを指摘した。

最後に御茶湯の担当者について、『大永四年細川亭御成記』『大館常興日記』から、前日までの茶具足の室礼を室町殿御末同朋が、当日の茶湯の用意を迎える側の大名家の同朋が、点茶の実際は室町殿御会所同朋が担当することを明らかにした。

結局、室町殿御成の公式プログラムに茶会が入ることはなかったが、これが再構成されて「茶の湯」の茶事に繋がるものとみる。

そもそもは、ある研究者から「池永宗作への書」(以下本書とする)の翻刻の信憑性について問われたことに端を発する。以前より本書の翻刻の齟齬に気付き、翻刻全文の検討を終了していたのが幸いして、正確な翻刻情報を提供できた。本書は確実に大正・昭和期の写本であるが、単に書写時が問題ではなく、どこまで原型を留めているかという点のほうが重要である。しかし、今回の翻刻検討により、西堀氏によって大幅に改竄され、活字化されていたことが判明した。

報告では本書について、西堀翻刻と報告者の底本翻刻の一部を提示することにより、底本を忠実に翻刻し、紹介することの重要性を改めて強調し、また本書を改竄前の姿に復元する作業を通して、本書が茶道史研究に有益なものか、どうかを見極めていきたい。



東京例会

四月二十五日(土) 午後二時

(会場:五島美術館)

「日本茶業史の縦糸」

寺田 孝重

日本茶業史は、『日本後記』の弘仁六年(八一五)の条にある、嵯峨天皇の勅令を嚆矢とすることが一般であるが、これに先行する伝説や飲用(食用)法も残存しており、謎の多いものである。今回は、これらを踏まえ、茶業史を概観した。

まず、茶の食用的利用法の存在と朝鮮半島における茶の歴史との比較や整合の必要性について指摘を行った。次いで、現在の日本にある製茶方法の招来に関する様々な伝承を紹介し、茶業史が持つ複線的な要素の解説を試みた。

平安・鎌倉期については、現在管見に入っている関係文献を年表的に紹介するとともに、一四〇五世紀については、茶園の存在を証明できる文献について、一覧表として紹介し、この時期の茶園が、弘仁六年に記述された国々と比較的重なっていることを指摘すると共に、茶業が産地化の様相を見せてくる過程を紹介した。

これらに立脚し、戦国期から江戸初期にかけて、茶業が全国的な農産物に展開してゆくことについて言及した。さらに、この間に起

こったであろう茶業技術の発展について、管見に入った茶臼の形態的な変化を紹介した。次いで、江戸期以降の茶業史の中で、大坂の「煎茶問屋」の発達を紹介し、「煎茶」の名称の出現具合などから、抹茶・煎茶の生産が並行的に行われていることから、この起源が室町期以前にも遡りうる可能性を指摘した。また、現代の茶業技術の一端や全国的茶業の分布を紹介した。

(平成二十六年十二月十三日)

「茶道古典全集本」紹陽・宗作茶書について

山田 哲也

『茶道古典全集』第三巻所収の「池永宗作への書」は、日本文化史研究の先達の一人、西堀一三氏により翻刻・紹介された「紹陽遺文」に所収されるものがあるが、底本と考えられる今日庵文庫架蔵西堀一三旧蔵書の本と比べると書名からして違っている。底本は題簽「紹陽宗作茶書」であり、内題は「紹陽及池永宗作茶書」である。また追加書込みとして「原本表題二「千利休自筆茶道秘書寫」トアリ」がつく。これら題簽、内題、及びその書込み情報を無視して「池永宗作への書」という書名が誕生しているのであった。

「茶人について」(仮)

平木しおり氏

「十二世紀の日中交流と茶文化」

中村 修也氏

五月二十三日(土) 午後二時

(会場:東洋英和女学院)

「日本における蠟茶と香茶」 岩間眞智子氏

「武士」から「茶人」へ

田中 秀隆氏

「武士道」と「茶の本」の位相の変位

中村 静子氏

「煎茶と点茶の語誌」

高橋 忠彦氏

「未定」

中村 静子氏

「煎茶と点茶の語誌」

高橋 忠彦氏

東海例会

四月二十五日(土) 午後二時

(会場:名古屋文化短期大学)

「江戸時代前期における千家茶道の確立

「元伯宗旦文書」と「江宗左茶書」を中心として」

原田 茂弘氏

金沢例会

発足五周年記念例会

テーマ「茶ノ湯文化・地域での発展を

目指して」

見に入った茶臼の形態的な変化を紹介した。

次いで、江戸期以降の茶業史の中で、大坂の「煎茶問屋」の発達を紹介し、「煎茶」の名称の出現具合などから、抹茶・煎茶の生産が並行的に行われていることから、この起源が室町期以前にも遡りうる可能性を指摘した。また、現代の茶業技術の一端や全国的茶業の分布を紹介した。

(平成二十六年十二月十三日)

「茶道古典全集本」紹陽・宗作茶書について

山田 哲也

『茶道古典全集』第三巻所収の「池永宗作への書」は、日本文化史研究の先達の一人、西堀一三氏により翻刻・紹介された「紹陽遺文」に所収されるものがあるが、底本と考えられる今日庵文庫架蔵西堀一三旧蔵書の本と比べると書名からして違っている。底本は題簽「紹陽宗作茶書」であり、内題は「紹陽及池永宗作茶書」である。また追加書込みとして「原本表題二「千利休自筆茶道秘書寫」トアリ」がつく。これら題簽、内題、及びその書込み情報を無視して「池永宗作への書」という書名が誕生しているのであった。

五月十六日(土)

●茶会

会場:金沢市立中村記念美術館

時間:午前九時〜午後四時

予定茶席数:一六〇名

(七席/事前登録・時間指定)

●見学会

会場:成巽閣(国指定名勝飛鶴庭、茶室清

香軒、清香書院)、兼六園夕顔亭、

金沢城玉泉院丸庭園「玉泉亭」

解説者:中村利則・茶の湯文化学会副会長

(京都造形芸術大学教授)

時間:午前十時三十分〜正午、午後一時〜

午後二時三十分、午後三時〜午後四

時三十分、各回二十名(計六十名/

事前登録)

五月十七日(日)

●記念講演

「茶会記と茶の湯文化について」(仮)

講師:谷 晃氏・茶の湯文化学会参与

(野村美術館館長)

時間:午前九時三十分〜午後十二時三十分

会場:石川県教育会館三階ホール

高知例会

七月十二日(日) 午前十時

(会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室)
「茶の湯文化学会二十七年大会の研究発表をテーマとしたシンポジウム」

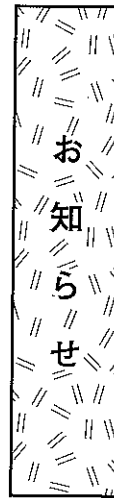
永吉 溪滋氏

軽食茶事 午後十二時～午後四時

席主 三名

会費 五〇〇円

※参加希望者は予め連絡をして下さい



平成二十七年総会・大会のご案内

平成二十七年総会・大会は、東京に於いて左記の日程で現在計画中です。詳細は四月下旬以降、別途ご案内致します。

平成二十七年六月七日(日)

総会・大会・懇親会

新刊紹介

*『松平不昧公茶会記二題』米澤義光著

能登印刷出版部 定価八、〇〇〇円(税別)

島根県立図書館所蔵の茶会記、加賀国金澤・亀田是庵所蔵の茶会記を比較検討する目的で刊行されたもの。松平不昧研究に欠かせない翻刻本。

*『古田織部四百年忌図録』実行委員会編

宮帯出版社 定価二、七〇〇円(税別)

本書は、茶人古田織部と対話したその一日と、席主による設えの創意工夫の全記録。

